

午前10時のマドリッド

会員 市原 麻衣



1 格闘技にちなんだ事務所名のおかげで、「先生も何か格闘技をやってらっしゃるんですか」という質問を何度も受けている。当法人に入所する以前は、一度たりともされたことのなかった質問である。新しく入所された66期の弁護士も、早速同じ質問を受けたい。

2 格闘技、とは言わないまでも、受け身の取り方くらいは習っておけばよかったなあと思ったのが、大学の卒業旅行だ。

私は、女の子2人で、フランス、スペイン、イタリアと回る12日間のプランを立てていた。その旅半ば、マドリッドでひったくりに遭ったのである。

手口は見事なもので、後ろからずっと近づいてきたかと思うと、私の斜め掛けのバッグをさっと持ち上げ、次にもすごい勢いで下へ振り切った。その勢いで、肩紐とバッグをつなぐ金具が壊れて外れ、あっという間にバッグを持ち去られてしまったのである。

反動で石畳にしりもちをついた私だったが、人間とっさのときには思いもよらない行動に出るものだ。私はそのまますぐに立ち上がって、犯人の後を追いかけた。英語とスペイン語でわめきながら走っていくアジア人というのは、なかなかインパクトのあるものだったのだろう。午前10時、呑気に街角で遅い朝のコーヒーなど飲んでいたマドリッド市民たちが、わらわらと一緒に犯人の男を追いかけて始めた。

それからは、犯人に道端のごみ袋を投げつける人あり、1ブロックほど走って脱落する人ありと、大騒ぎ。どれくらい走ったのかわからないが、最終的には、ジョギング中のスペイン美女やらクリーニング屋のおじ

さんやら4人ほどが犯人に詰め寄って、バッグを取り返してくれた（もっとも、財布と携帯は抜かれてしまったけれど）。

3 その後がまた大変で、4人とパトカーを呼び止め事情を話しているうちに、私は石畳に打ち付けた肘が痛むことに気づいた。今度は救急車を呼んだが、どの病院に行くかわからないという。友人とはぐれてしまっていた私は、いったんホテルに戻ることにし、パトカーで送り届けてもらった。4人は最後まで残って見送ってくれた。

結局肘は亀裂骨折していた。見事犯罪被害者となったうえ、人生初の骨折をして日本でも乗ったことのない救急車に乗り、パトカーデビューまで果たすひと騒動だったわけだが、私にとってはなんだかとても良い思い出になっている。

4 それはきっと、たくさんの人が助けてくれたからだ。十分お礼を伝えることもできなかったが、最後に残ってくれた4人の顔は今でも覚えている。あの場で誰も助けてくれていなかったらと思うとぞっとする。バッグも取り戻せなかったし、病院に行くのも一苦労だっただろう。異国の地で途方に暮れるほどみじめなことはない。

5 今、依頼者と法廷に行くと、ふとあのときのことを思い出す。裁判所慣れしている依頼者なんてまずいない。どうしたらいいかわからないまま、慣れない場所で助けを求めている、そんな依頼者にとってここは異国も同然だ。…そう思って、頼れる案内人となるべく日々奮闘している次第である。